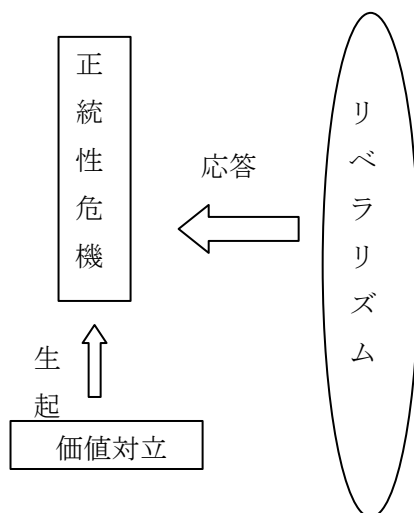


公共性の哲学としてのリベラリズム

0.はじめに

井上達夫の考える、
リベラリズムの思想伝統とは？
今ある正統性危機とは何か？



1. 「価値対立」克服の困難さ～「利害対立」と「価値対立」のちがい～

私たちの生の葛藤は私的利害の対立という次元にとどまらない。

↓

- ・ 「利害対立」は充足要求であり非排他的であるのに対し、「価値対立」は妥当要求であり排他的になる。
- ・ 利益を争うもの同士は同じ価値にたつ。

利害対立に適用されるのと同様の公共性理解が価値対立に適用できないならば、政治社会の公共性はいかにして可能か。

↓

民主制？その基礎となるものは何か。

×功利主義 ×多数決（相対主義） ×合意

↓

価値志向的存在として人々を尊重しながら、対立する多様な価値を持つ人々が共存しうる公平な枠組みを政治社会がつくるにはどうしたらいいか。

2. 公共的価値としての正義～妥当性・中立性と公共性のちがい～

妥当要求を持つ価値の対立＝「善き生」の構想の対立

☆ よき形態のリベラリズムは価値対立の問題をいかに解決するか

リベラリズムは、「善き生」を尊重するからこそ、「善き生」の構想と区別された「正義」を基底とし、これを公共的価値とする。

※ 価値の妥当性は公共性を含意しない。「正義」は正しい「善き生」の構想ではない。

- ・ 他の善き生の構想と同一平面で対立するものではなく、多様な善き生の構想を共通して制約するもの。

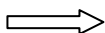
↓

- ・ 多様な善き生の構想を制約するためには、ある特定の「善き生の構想」に依存することなく正当化されなければならない。

正義の基底性

- ・ 正義の公共性：正義は政治社会の構成原理であり、政治社会における公私の力の行使を規定するとともに、公権力によって強行されうるものである。
 - ・ 正義の独立性：正義の原理は「善き生」の特殊構想に依存することなく正当化可能でなければならない。
 - ・ 正義の制約性：「善き生」の特殊構想が正義の要求と抵触する場合、後者が優先する。
- 公共性は独立性と制約性を要請し、独立性と制約性を満たしていることが公共性を基礎付ける。

—このような正義が政治社会の公共性を基礎付けるのが井上リベラリズムの信念—



「善く生きるとはどういうことか」という解答だけでなく、このような問いを發し、その探求に自己の生を捧げる人間存在の可能条件に関わる「人格構成価値」を保障するもの。

(善き生の諸構想一般とは異なった仕方で善く生きることに関わる価値)

↓

リベラリズムにおける公共的価値とは、価値志向的存在としての諸個人の尊重を基礎として公平な枠組みを設定する。

2. 補章～ミルの危害原理との差異～

- ・ リベラリズムを尊重する人格が「善き生」を構想するときには他者との関わり方を必然的に含み、ミルの危害原理とは発想を異にする。

【参考文献】

井上達夫『他者への自由 公共性の哲学としてのリベラリズム』創文社 1999